

## 編集後記

ここに『社会と倫理』第二十一号刊行に当り、収録した諸論考の概要を紹介したい。本号では、特集を二つ組むことを得た。

特集1は、経営倫理ないしビジネス倫理に関連するものである。巻頭には、若手研究者のジクムント・ヴァグナー・ツカモト氏にご寄稿いただいた。昨年英国から氏をお迎えして懇話会を開いた後で本紀要掲載の件をご相談したところ快く引き受けて下さり、しかも新しく書き下ろしの論考を翻訳のための時間を顧慮されて早々とご投稿下さった。フリードマン流の経済学的な観点から、議論を三層に区分して、内在的にどこまで周到な倫理的議論を展開できるものであるか、読者は熟読されたい。なお、本論考の原文は後日、当研究所ウェブページで公開される予定である。谷口照三教授は、日本経営倫理学会で重きをなすベテラン学者であり、近い将来に出版を予定されている大規模な著作の

エッセンスを丁寧に開陳された懇話会でのご報告を今回掲載することができた。湯浅誠氏は、在野の現場で「貧困」の問題に全面的に取り組んでおられる社会運動の視点から、重要な問題提起をされている。「格差」社会をめぐるって喧しい議論が錯綜する中、「貧困」や「若年層ホームレス」の問題がメディアで盛んに報じられ始める少し前の時期に懇話会でご講演いただくことができ、極めて先見的な報告になっている。高浦康有氏は、書き下ろし論考をご寄稿下さり、CSR（企業の社会的責任）問題に関連させて、シテイズンシップ概念を核とした現代企業の福祉国家的役割の考察を批判的社会理論の視点から展開して下さっている。なお、湯浅氏の取り扱う問題をビジネス倫理の圏域に含めることに奇異な印象をもたれるかもしれないが、本特集では、「経営倫理」に尽きない「働くことの倫理」としての「広義のビジネス倫理」を構想しており、その奇異感そのものが、問題領域の組み替えを指向する本特集の狙いの一つである。経済学、経営学、社会運動、社会学といった多様な視点からビジネス倫理の射程を問い直す特集となったと考えている。

次に、特集2は、広告倫理に関するもので、

英語圏と日本の先行研究を整理したサーベイ論文集であり、編集者の一人奥田が企画運営にあたった研究会の成果である。各論考は執筆者相互による綿密な推敲を重ねて書き上げられた。紀要掲載に当たっては、査読手続を踏んだ上で、全体の相互関係にも目を配りつつ編集作業を遂行した。本特集の成立経緯や狙い等の詳細については「緒言」をご覧いただきたい。

さて、論説の部について少し述べておこう。シーゲル所員は、オーストラリアの「盗まれた世代」を具体的な事例として紹介しながら「人種主義と二十世紀の世界」を論じている。又、編集者の一人山田は、メスナー自然法論のいわば到達点を示しているとも考えられる晩年の論文集を素材に、彼の問題意識と中心課題に取り組んでみた。本紀要第十八号所収の「ヨハネス・メスナーの生涯と著作」のいわば続篇である。併せて、社会倫理の基礎のコナーでは、メスナー晩年の論文でK S Zの叢書「教会と社会」に収められているものを訳出した。これによつて、いわば「特集3 ヨハネス・メスナー自然法論」が提供されるに等しい。併読していただけるならば幸いである。それに現代ドイツで精力的に活躍しているローター・ロースの最

近の論文から人間の尊厳に関するものを訳出した。

更に、書評コーナーには、中野涼子研究員が欧文著書を取り上げて、これを紹介論評することとなった。研究所で取り組むべき現代的課題の一つとして「人道的介入」ないし「保護する責任」の問題を位置づけているところから、時宜を得た書評になっていると思う。

本号においても、多くの方々からご寄稿いただくことができ、多彩な内容を盛り込むことができた。前号に続いて、若手研究者による査読付き論文も二篇掲載できた。今後ともこうした取り組みは継続していきたいと考えている。各執筆者には心からお礼を申し上げる。尚、次号第二十二号は、来年九月刊行を予定している。引き続き、『社会と倫理』をご支援賜るようお願い申し上げます。

奥田太郎・山田 秀